

Fluctuat nec mergitur

少し思い出話から始めましょう。2000年に情報学環は発足したのですが、当時コンピュータの「2000年問題」ということがさかんに議論されていました。1900年代から2000年代への移行によってコンピュータの設定に狂いが生じ誤作動が起こるといった問題です。これも新ミレニアムへの移行にともなうひとつのエピソードだったといえます。

その2000年春の新大学院発足を控えて2月だったか設立準備シンポジウムが開かれました。そのとき私は「情報と人間」というタイトルで短い講演をしました。私のように人文科学を専門とする人間が情報学環のような組織に参加することには、どのような意味があるのかということをお話したつもりです。そのときはまだ入学試験が行われる前でしたから、半ば冗談めかして「もし私が試験官ならば、次のような問題を入試に出題します」とも言いました—

問い：

「情報と人間」の関係をめぐって、「東京大学大学院・情報学環・学際情報学府」設立の人類史上の意義を述べよ。

このように、やや誇大妄想気味な出題を試みてみたわけです（笑）。それに対して私が用意した答えは次のようなものです—

答え：

「人類」と呼ばれた生物による文明が20世紀

末から21世紀初頭に経験した三つのゆらぎに対する〈愚かな／賢い〉リアクション

この「出題」は、「情報と人間」という観点から考えたときに、「人間」というものが20世紀後半から21世紀にかけてどのように変化してきたのかを問うことをねらった設問です。もちろん生物的には100年ぐらいのスパンでは「人類」は変化するはずがない。しかし「人間」として「文明のかたち」や「文化」はとても大きな変化を起こしてきている。「情報学環」という組織ができたことは、非常にマクロに言えば、そのような大変化に対するリアクションとして位置付けられるのではないかとこのことを問題提起したわけです。ただし、それが成功するか失敗に終わるかは、私たちや皆さんの答えの出し方にかかっているわけである、ということが言いたかったのです。

その「答え」の中で、私が言及した「三つのゆらぎ」とは、つぎのようなものです—

三つのゆらぎ

その1 「人間」のゆらぎ、あるいは、Post-Human

その2 「知」のゆらぎ、あるいは、Interdisciplinary

その3 「大学」のゆらぎ、あるいは、Interfaculty

まず「人間」のゆらぎについて。「人間」と

いうものは、生物学的には確かに、ヒトがヒトになって以来ずっと存在していると考えられます。しかし文明論的あるいは文化論的に言うと、そうとはいえない。「人間」を基礎にして文明や文化が成り立っている時代がひとつの区切りを迎えている。とくに「情報」という新しい次元の介入によって、「人間」の文明の前提がゆらいでいる。「人間」が自明とはいえなくなる、そういう時代の状況を「Post-Human（人間以後）」という語で呼んでみてはどうか、ということを書きました。

そういう状況の中で「知」もゆらいでいる。「知」というのはわれわれがおこなっているような「学問（ディシプリン）」を成立させている文化的体系のことですが、「人間」を基本にして成り立っていた諸学問の配置がゆらいで、「学問」と「学問」の間（あいだ）のところに一つまり、「Inter-disciplinary」な部分に一つ、むしろ時代の「知」を編成する原理が移行している。そして「情報」とはまさしく、そのような既成の学問と学問との間（あいだ）に起こりつつある「知」の流動化の問題そのものであると見ることができるのではないのか。そのような認識を書いたのです。

そうした「知」のゆらぎに応えるかたちで、「情報学環」の登場にみられるように、「大学」が制度を組み替えようとしている。周知のように、近代の大学は、「学部」から構成されてきました。「学部」は、英語でいえばfacultyですが、それは人間の能力という意味でもある。「大学 University」全体を一個の「人間」と見立てて、その基本的な「能力 faculty」を構成するのが「学部 Faculty」だったのです。1810

年に創設されたベルリン大学をモデルとした、こうした「大学」＝「人間」、そして「学部」＝「能力」という図式が現在では自明ではなくなってしまっている。「情報学環」の、「学環」という言葉の英語訳は「Interfaculty Initiative」なのですが、「情報」に関して、学部と学部の間で「大学」制度を問い直そう、そして、組み替えようという大学の組織戦略が、「情報学環」にはこめられていると述べたのです。

私が今まで研究者としてやってきた仕事の中でも「哲学」に近いものとしてヨーロッパの現代哲学の研究と翻訳を挙げることができます。20世紀の知の巨人と呼ばれた哲学者のひとりに、ミシェル・フーコー（FOUCAULT, Michel 1926-1984）がいます。古典主義時代から近代にかけての知の認識論的配置の変化を研究した記念碑的著作『言葉と物』（1966）の最後の結論部で、フーコーは、認識の歴史における「人間」というものはただか二世紀ほど前、「近代」の始まりに発明されたものにすぎず、その間近な「終わり」はすでに告げられているとして、次のように結論しています—

人間は、波打ち際の砂の顔のようにやがて消え去るであろう

これは「人間の終焉」というテーマで、20世紀の思想界に大きな衝撃を与えた言葉です。『言葉と物』は1960年代の本ですから、そこから二世紀さかのぼると大体、18世紀の後半から19世紀初頭頃、つまり「啓蒙の世紀」と言われ

る時代になります。1800年頃に「私たちの近代」というものが始まって、そこで立ち上げられた「認識」のモジュールこそが「人間」だとフーコーはいうのです。近代においては、「人間」を中心的な形象として「知」の配置が生み出されてきたのですが、その知の配置（それを「エピステーメー」とフーコーは呼びます）がいまでは崩れ、「人間」という認識ユニットは別の次元の浸食を受けて「波打ち際の砂の顔のように」消えつつある。特に「言語」や「記号」をめぐる認識論的次元の浮上を受けてパラダイム・シフトが起こりつつあるのだ、と述べたのです。

このフーコーの診断を手がかりとして、「人間」をめぐる「知の変容」の問題と、私たちがこの大学院で固有に関わる「情報の知」と「人間の知」との対面（インターフェース）について考えてみるのがよいと私は問題提起したのでした。

それから7年ばかりの歳月が経って、情報学環という大学院にも博士号を受けて修了する人たち続々と現れ、いろいろな分野で活躍する卒業生も多数輩出して、われわれの「顔立ち」ができつつある — 砂の顔ではなくて（笑） — と思います。それはとりもなおさず、先の問い

へのわれわれの答えが、「賢い」ものだったのかそれとも「愚かな」ものだったのか、という成果が目に見える時期にさしかかっているのだとも言える。

「情報学環」とは、ギリシャ神話に出てくる黄金の羊の毛皮を求めて50人の勇士がこぎ出す「アルゴ船」のようなものであると私は考えています。様々なところから調達した船のパーツは航海のあいだにことごとく波間に消えてかたちをとどめないのですが、しかし「アルゴ船」自体はいつも同じ船の原型を保って、ついに英雄たちは黄金の羊の毛皮を持ち帰ることに成功する。しかも王女「メデイア」をとともに連れ帰るのです。

「人間」も「知」も「大学」も大きな「ゆらぎ」を重ねてきているからこそ航海に乗り出した私たちの冒険です。冒険にはさまざまな苦難がつきものである。波をかぶるときもある、船が沈みかけるときもある。表題は、いわずと知れたパリ市の紋章に刻まれているラテン銘「たゆたえども沈まず」ですが、学環も波を受けても沈まず、しぶとく航海をつづけて、「人類史上」のミッションを達成してもらいたいと願っているのです。



石田英敬（いしだ ひでたか）

1953年10月生まれ

【専攻領域】記号論 情報記号論 言語態分析

【著書・論文】

知のデジタル・シフト（編著 弘文堂）2006

現代思想の地平（放送大学教育振興会）2005

記号の知/メディアの知（東京大学出版会）2003 など

【所属】大学院情報学環教授（総合文化研究科兼任）

【所属学会】日本記号学会、COLLEGE INTERNATIONAL DE PHILOSOPHIE